

## 銃後の家庭について

海老田 ミツ

昭和 20 年 4 月 1 日、主人召集、残雪多き年であった。兵士 3 人が中村の地に別れを告げ、出発した。現在の 7 線道路は雪融け水で橋を渡れず、ハサギ丸太を束にした上を渡ったり、土堤の上を歩いて、私は子を背にして見送るも、水位がどれ程増減するやもわからない。案じて途中で引き返す。

兵士 3 人を見送りの男の方々は知人の家で待機して、夜中零時、茶志内駅を出発、旭川七師団第 28 連隊に入隊する。

4 月 1 日に実家の父親が逝ったことを、私はわからずにいた。それは石狩川が氾濫寸前の水位で渡し舟も通らず、奈井江高島線茶志内間も不通、当時は電話も無く、4 月 6 日に訃報の電報が配達されて初めて知った。

中村の地に嫁いで 3 年目、病弱の両親と 3 人の小姑と赤子、私と子守りさんの 8 人家族であった。耕作面積は当時水田 4 ヘクタール畑 2 ヘクタール計 6 ヘクタールと言えば、多い作付だった。どなたかに貸したいと思い、頼んでみたが、男手不足といふ召集令状が来るやら心配で、誰も借り受けてくれる人が無く、余儀なく全面積を耕作することを決意した。

いよいよ開墾本番となり、援農学徒 2 人の 1 週間の手伝いを受けた。水稻の種を蒔く準備に取りかかったが、天候不順のため期間終了で援農学徒は本州に帰る。4 月 18 日に 3 週間の援農学徒 2 人が割り当てられ、ようやく畑が乾き始め、5 月に入って種籾を蒔きはじめた。

水田は五分のプラオで耕した。私は背が低いので畔を切り耕してしまうので大変だった。でも若さで働き、出面さんには 1 町程しか耕して貰わなかった。水田は鬼ハロー\*1 だけ、畑は自分の手でやったが、代掻きは女手ではできない。親戚一同の御世話になって済ます。畑は泥炭地で、女手でもできた。田植えは近所の早乙女さんで終わらせた。

昭和 20 年 7 月中頃と思う。毎日の田草取り最中に空襲警報。上空を偵察機や爆撃機が来たのか、耳が裂けるような音。ともあれ飛行機が来れば畔に伏して寝る。仕事もおちおちとできなかった。夕方になれば燈火管制で窓という窓や光の洩れるところは、全部塞ぐ作業をした。テントや澱粉袋の空いた紙を広げ、炭のすすに油を混ぜて練り合わせたものを、ボロで紙に塗り、まっ黒にした物を、夜、窓に張り付ける。

防空壕掘りもした。8 月に入って埼玉県より援農学徒 2 人を 3 か月受ける。我が子同様ひ弱い学生さんに、河川堤防の崖に防空壕掘りの作業、畳 3 枚位の広さの所に枠を造り、竹筒をいれて板や丸太を敷き、一室を造りあげた。

非常食として、餅、炒り大豆、アラレ、かき餅、梅等用意して置く。竹槍を持ってヤァヤァと突く稽古もした。綿入れの防空帽子を作る。作業衣は土や草に似た同系色の物であった。

さて、8 月 15 日朝の臨時ニュース、ラジオでお昼に天皇陛下の重大放送があるとのことである。正午の放送で日本が無条件降伏をしたことを知った。

その御言葉、天皇陛下のお声、いまだ耳に残っている。敗戦となれば、生きておられるのか、殺されるのか、心配だった。

20 日に予告も無く主人が無事で、着のみ着のままで帰って来た。まず一安心した。

田は春以来天候不順で稗拔きの状態だった。

稲刈りは 10 月上旬から始まるが、大凶作となり、反収 1 俵以下だった。しかし出荷が厳し

く、強権発動となる。農家をしながら配給米を買い、家族の多い食べ盛りの子供には1日5合の米が割り当てられる。大豆、トウキビ、芋団子、大根葉、中長など色々混ぜて食べた。あるとき背に負った子が「早く南瓜がなればいいね」と言った。私は涙がこぼれた。

今は亡きある警察官が夜を目ざし、納屋の仕事中に入ってきて、燃料に取り置いた粃殻の中まで棒を突き刺し搜したりした。酒好きの巡査でドブクロのある家庭に入りこんで、捜すことなく一杯飲んで、手土産求めて帰る。幾度となく来る。

昭和15年頃から物資が不足し、点数券となった。木綿糸一束買うにも点数券が必要だった。農家ゆえ自給自足で鶏を飼って玉子を得、春に子豚を買って育てて、12月に殺して肉を味噌漬けや塩漬けにして保存食とした。子供が生まれても衣類がなく、ボロに包んでいる家もあった。結婚するといってもなかなか物資が手に入らず、古着等を「闇」で買い求めた。

昭和20年の大凶作で物資不足はますます激しく、泥棒が農家の作物を荒らして行く。中には子供連れのお母さんも来た。可哀そうで、米の粉があったのであげた。仁義を切って脅す者もいた。

昭和21年以後石炭が無い。4キロ程離れた14線の下流で飴玉のような石炭拾いをした。ジョレン\*2で引き揚げて1日3分か5分位拾う。川は黒山の人でお祭り騒ぎ。全く火力が無く粃殻を混ぜて燃料にした。又、土で造ったかまどでトウキビの芯や大豆殻等を押切で切ったものや、その他菜種殻や藁なども燃料にした。衣類は二重三重に重ね継ぎをし、糖分はビートや砂糖キビ等を搾って飴菓子を作り、芋を摺りおろして澱粉を取ったり、芋団子を作ってたべた。食器の代用品として、ホタテ貝の殻を皿に使用した。畑仕事に行くのに稲藁で作った草履を履く。煙草やマッチは配給となり、日頃飲まない酒や煙草を配給となると人間も変わるもの、我も我もと配給を受ける。

昭和15、16年頃、日支事変や大東亜戦争が始まってから私達女子青年団は、出征兵士に千人針を送ることになり、女子が赤糸で刺して作る胴巻きを持って、寅年生まれの子供には年の数だけ刺して貰えるので、夜その家を訪問したりした。当時出征兵士を見送る姿は羽織袴だった。生育馬を飼育し、出征馬として見送った。軍用燕麦は何十俵も作り、四斗樽に入れて足で踏んで艶を出し、たくさん出荷したものだ。

(えびた みつ 大正7年生まれ)

**\*1 鬼ハロー** ハロー（砕土機）の一種。馬にひかせて水田を大まかに砕土する。空知地方では大正のころから急激に広まり、畑作にも使われた。

**\*2 ジョレン** 「鋤簾」土・小石などをかき寄せる道具。長い柄の先に、竹で箕のように編んだもの、または鉄板製の歯を取り付けたもの。